

Title	銀座復興
Sub Title	The resurgence of Ginza
Author	丸山, 徹(Maruyama, Toru)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2014
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.107, No.2 (2014. 7) ,p.281(143)- 302(164)
JaLC DOI	10.14991/001.20140701-0143
Abstract	<p>関東大震災という大きな異変によって生じた人心や世相の変化 - 永井荷風, 水上瀧太郎, 久保田万太郎ら文学者たちはそれをいかにとらえ, 作品にうつしたか。三年前の東北の震災についても同じ問題を考えるにはいましばらくの時間を要するが, そのための視座を定める材料を提供したい。</p> <p>How did writers such as Kafu Nagai, Takitaro Minakami, and Mantaro Kubota grasp and describe the changes in the general public's perception as well as social conditions arising from the Great Kanto earthquake upheaval?</p> <p>It seems necessary to wait for a period of time to consider the same problems caused by the Tohoku earthquake three years ago.</p> <p>The purpose of this study is to pave the way to establishing a viewpoint for a similar task concerning the new disaster.</p>
Notes	特集 : 大震災から三年 : 経済と世相
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20140701-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20140701-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

銀座復興

The Resurgence of Ginza

丸山 徹(Toru Maruyama)

関東大震災という大きな異変によって生じた人心や世相の変化——永井荷風、水上瀧太郎、久保田万太郎ら文学者たちはそれをいかにとらえ、作品にうつしたか。三年前の東北の震災についても同じ問題を考えるにはいましばらくの時を要するが、そのための視座を定める材料を提供したい。

Abstract

How did writers such as Kafu Nagai, Takitaro Minakami, and Mantaro Kubota grasp and describe the changes in the general public's perception as well as social conditions arising from the Great Kanto earthquake upheaval? It seems necessary to wait for a period of time to consider the same problems caused by the Tohoku earthquake three years ago. The purpose of this study is to pave the way to establishing a viewpoint for a similar task concerning the new disaster.

## 銀座復興\*

丸 山 徹

### 要 旨

関東大震災という大きな異変によって生じた人心や世相の変化——永井荷風、水上瀧太郎、久保田万太郎ら文学者たちはそれをいかにとらえ、作品にうつしたか。三年前の東北の震災についても同じ問題を考えるにはいましばらくの時を要するが、そのための視座を定める材料を提供したい。

### キーワード

『断腸亭日乗』、「露ふかく」、「銀座復興」、「九月一日」、言葉の力

### はじめに

この 2 月 8 日（平成 26 年）、東京にも驚くほどの雪が降りました。ちょうどその前日まで、私は仙台・福島周辺を中心に、三年前の大震災の被災地をたずねて、現時点での復旧・復興の状況を勉強してまいりました。

まず仙台市内にほど近い<sup>ゆりあげ</sup>閑上の海辺へ行ってみますと、そこは一面の<sup>くさはら</sup>草原。ところどころに破壊されたまま立ちつくすかのような建物が残っていますが、ガレキはすっかり片づいております。しかし草原に踏み入ってよく見ると、建造物の土台だけがあちこちに残り、花が供えられ卒塔婆が立っているではありませんか。三年前にそこで起こったことを、まざまざと思い知らされました。

ところが福島へまいりまして、私どもが目にしたものは、仙台周辺とは比べ物にならない、まことに驚くべき風景でした。福島駅から川俣・飯館・南相馬を抜けて走ってゆく車窓から見る村々の家はぴったりと戸を閉ざし、手入れのゆき届いた畑にも全く人影がない。そして村全体をすこし積

---

\* 本稿は次のふたつの機会に行なわれた講演をひとつの話として再構成し、若干の加筆・修正を施したものである。

- 公益社団法人糖業協会昼食講演会（平成 25 年 3 月 21 日）
- 慶應義塾読書会例会（平成 26 年 2 月 13 日）

いずれも会場は糖業会館であった。



草原に漂う船



慰霊の木塔

南相馬の海岸風景

もった雪が冷たく覆っていました。浪江町の海辺へ出ますと、ここも一面の草原ですが、閑上海岸とは似ても似つかぬ相貌が目飛び込んできます。津波に打ち上げられた大小の船が幾十艘も、草原に漂う難破船のように放置されたままです。こわれた自動車やオートバイが山積みされた無残な光景もあちこちに……。みな原子力発電所の事故によって被曝した残骸で、片づけようにも持っていき場がないのです。

海沿いの一本道を発電所へ近づくにつれ、手にした線量計の数値がグングン上ってゆく——実に不気味な経験でした。いたるところで行なわれている除染作業のご苦労を見ながら、これで雨でも降り、汚染度の高い水が山から流れてくれば元の黙阿弥ではないか——素人の目にはそんなふうに見えて、なんとも言い難い徒労感を覚えました。

公共インフラの復旧度も項目ごとに随分と差があって、半ば以上着工しているにもかかわらず、完了に到ったものは殆どゼロといった重要項目もございます。現場の人手不足が著しく、公共工事の入札に応じる業者が見つからないために、せっかくの予算が執行できず次年度へ繰り越しになってしまうという、じれったい現象も生じている。また生産活動の業種ごとの立ち直りのスピードにも大きな差があります。

これだけ巨大な災害を蒙った地域の人々の心には平常時には決して見られない変化が生じたはずですし、それが合成されて社会の世相も変貌したにちがいません。そして月日の経過とともに世の中が平常に復してくるにつれて、被災時に現われた人心や世相の特異な動きは、知らず知らずのうちに静まって見えなくなってしまうものです。

こう申しますと唐突なようですが、私は『仮名手本忠臣蔵』の冒頭の詞章を思い出します。

〈嘉肴有といへども食せざれば其味をしらずとは。国治てよき武士の忠も武勇もかくるゝに。たとへば星の昼見へず夜は乱れて顕はるゝ。〉

放置すれば消えてしまう人心・世相の動きを析出し、それに形を与えうる人の営為がもしあるとすれば、たとえば文芸の力をそのひとつに数えうるかもしれません。

そこで今日は、数字でとらえることのできる復旧・復興の経済的現状について申し上げるのではなく——それはまた別の機会にお話することにして——、こうした思わざる災害を蒙った人々の心ごころ、社会的世相の変貌を文芸作品がいかにかに把握し、写しとってきたかという問題を主題にしたいと存じます。このたびの震災に直接間接に取材した文芸作品もかなりの数に達しているようです。しかしただ今申しましたような視点から、これら最近の作品について語りますには、いましばらく時間の経過が必要でしょう。今日の話は時代を90年ほど辿りまして、関東大震災後の人心・世相の動きと、それを反映したいくつかの文芸作品を材料にして申し上げたいと思います。そうすることがこのたびの震災をめぐって同じ問題を考えるための、いわば座標軸を与える作業になるであろうと確信するからでございます。

文人たちは如何に災害に遭遇し、そこに何を見、それをどう作品に写したのか——。

### 荷風の『日乗』より

大正12年(1923)9月1日正午、関東大震災。既に大正5年に慶應義塾の教授を辞しておりました永井荷風は、この日麻布市兵衛町の自宅・偏奇館にあって書見中でありました。『断腸亭日乗』のこの日の記事は地震の瞬間を簡潔な筆致で次のように描写しています。

〈九月朔。習爽雨歇みしが風猶烈し。空折々搔曇りて細雨烟の來るが如し。日將に午ならむとする時天地忽鳴動す。予書架の下に坐し嚶鳴館遺草を讀みゐたりしが、架上の書帙頭上に落來るに驚き、立つて窗を開く。門外塵烟濛々殆咫尺を辨せず。兒女雞犬の聲頻なり。塵烟は門外人家の瓦の雨下したるが爲なり。予も亦徐に逃走の準備をなす。時に大地再び震動す。書卷を手にせしまゝ表の戸を排いて庭に出でたり。數分間にしてまた震動す。身体の動揺さながら船上に立つが如し。門に倚りておそるおそる吾家を顧るに、屋瓦少しく滑りしのみにて窗の扉も落ちず。〉

幸いにして偏奇館は無事でした。

9月4日、荷風は母・恆<sup>つね</sup>の安否を確かめるために西大久保の本家をたずねました。本家では、父・禾原久一郎は既に歿し、弟の威三郎夫妻が母をまもって暮しておりました。この弟とは殆ど義絶に近い状態でしたから、荷風としては、母親を見舞うにもある種の覚悟が必要だったろうと思います

が、ちょうど威三郎は出張中でした。幸い邸宅も母も無事でした。恆は、鷺津穀堂の娘ですから、実家である下谷・鷺津家の状態に心を悩ませておりました。そこで、荷風は威三郎の妻・譽津とよつを伴って探索に向かいました。大久保から牛込・水道橋・本郷を経由して、ようやく避難先の上野へ達しました。電車・自動車が使えないので、全行程徒歩でございました。まだ火の鎮まらぬところもあったそうです。避難先を示す立札が林立し、丹念に探しても求める名は見つかりません。声をからして呼んでも応ずる者がありません。目的を果たさず帰る途中で力尽きた荷風を、しかも大男の荷風を、譽津が背負って歩くという場面もあったようです。もっと恐しかったのは——のちにもお話し致します自警団でしょう——竹槍をかまえた、気の立った一団にとり囲まれて誰何され、深刻な危険にさらされたことです。頼りない小さな声で「永井です」、「永井荷風です」と名のつても一向にラチが明かず、譽津の懸命の釈明のおかげで九死に一生を得て西大久保へ戻ったのでした。

以後数日、荷風は西大久保に滞在したらしいのですが、『日乗』には「この日初めて威三郎の妻を見る」、そして一泊したとのみ記されております。弟・威三郎との関係から、あまり書きたくないできごとだったのでしょう。いま申しましたことを私は秋庭太郎の労作『考証永井荷風』で知りました。

9月11日、被災した知人の平澤某夫婦とその縁故の女ふたりをしばらく偏奇館に滞在させたのは、利己的な荷風としては珍しいことです。女ふたりというのは今村お榮とその祖母。荷風はこの寄り合い所帯をさして苦にするふうもなく、むしろ楽しんでさえいるようにみえます。9月23日には、朝からお榮を伴って谷町の風呂屋へゆき、夜は電燈を滅して、あえて暗い燈火の下に主人・同居人ともども膝を接して雑談、「窗外風雨の聲頻なり」と、まんざらでもないようです。実は荷風は初めから、お榮に強く心魅かれていたのです。お榮は25歳、父は別居して房州におり、母は芸者でしたが行方が知れず、お榮は父方の祖母に引き取られたのです。虎の門の女学館で教育を受け、やがて貿易商に嫁して子までもうけたのですが離婚、高名な書家や俳優の妾だったこともある——こういう経歴の女です。荷風の心が急速にお榮に傾いていく様子は『日乗』からはっきり読みとることができます。

〈お榮はもともと藝者の兒にて下町に住みたれば言語風俗も藝者そのまゝなり。此夜薄暗き蠟燭の光に其姿は日頃にまさりて妖艶に見え、江戸風の瓜實顔に後れ毛のたれかゝりしさま、錦繪ならば國貞か英泉の画美人といふところなり。……(中略)……折々地震の来る毎に手を把り扶けて庭に出るなど、俄に美しき妹か、又はわかき戀人をかくまひしが如き心地せられ、野心漸く勃然たり。〉(9月23日)

10月末、お榮は偏奇館を離れるのですが、荷風は翌月には再びお榮を同居させ、「家事を執らしむ」こととなりました。これ以後、お榮の呼称が小星と変わります。つまり妾のことです。荷風が『下谷叢話』(大正15年刊)の筆を起こしたのも、ちょうどこの頃です。ここにご覧に入れますのが、その初版本でございます。[『下谷叢話』初版を供覧]

〈夕暮に至り風忽寒し。鷺津穀堂大沼枕山二家の傳を起草す。〉（11月3日）

〈雨ふりて夜静なり。燈下余は星巖集を読む。小星は爐邊に草藁の野紙を摺る。清福限りなし。〉  
（12月10日）

震災後の荷風はこうして家を失うこともなく、かえって『下谷叢話』の着想と、美しき同居人を得たのですが、ちょうど一年ののち、お榮は荷風のもとを去ることとなります。

### 「露ふかく」（一）——心ごころ

荷風が慶應義塾の教授として文学を講じ、また『三田文學』の創刊に尽力した甲斐があって、三田からは幾人かの有望な若き作家が輩出されました。水上瀧太郎、佐藤春夫、久保田万太郎といった名前がまず浮かんでまいります。

その中のひとり久保田万太郎は当時浅草の北三筋町に住んでおりました。田原町に袋物製造を営む家に生まれ、やがて家産が傾いて駒形へ移りましたのが大正3年。この家が類焼の災にあって、大正7年に今度は北三筋町へと越したのです。その翌年、久保田は谷村京と結婚します。京は今龍という名の浅草の芸者で、新派の名優・喜多村緑郎が媒酌をつとめました。

震災の日、久保田は二科會の展覧会を見るために北三筋町の家から上野へ出かけました。広小路で電車を降り、山へは行って涼しい木陰を選んで歩いていたとき、大きな揺れを感じた。

〈木の梢があらしのやうに揉めた。——枝の折れて落ちる音が鋭くつづいた。〉

いそいでわたしは広い車道へ出た、——みると不忍のはうは一めんの土けむりだつた。〉

北三筋町へ戻ると、

〈空に、炎のかげがあくまで暗くみなぎつた。——燃えさかる火の音は疾風のやうに聞えた。〉

これは「夏かげ」（大正13年）に書きとどめられた久保田の記憶です。そして誰れからともなく聞こえてくる、「十二階が倒れてあの近所は一めん火の海だ」、「花屋敷ぢやア助らないとみて生きものをみんな短銃でうつ騒ぎだ」といった不安な噂の声も記録されております。下町のことで久保田も半纏に着がえ、身づくろいをしたところへ、町内の仕事師が「風さへかはらなければ御心配はありません。——お片づけになることはありません」というので、助かった、大丈夫とふんでいたのもつかの間、二時間ほどのうちに本願寺が焼け落ちた。入谷から出た火が松葉町へぬけ、風にあおられて広がっていったのです。

被災した久保田は妻子とともに駒込神明町の大場白水郎の家へ厄介になり、両親・弟・妹は菩提寺の本郷・喜福寺へ逃れました。

11月の末、久保田一家は日暮里渡辺町に居を構え、はじめて親子三人水いらずの落ち着いた家庭生活を得たのです。その頃の句に――

味すぐるなまり豆腐や秋の風

震災後はずっと洋服で立て切っていた久保田でしたが、翌年の初夏の頃にはまた着物が恋しくなり、昔の結城縮を仕立て直して着る気分が甦ったようです。小山内薫の築地小劇場の準備が整って、小山内を招いての講演会が三田山上で催されたのもこの頃でしょう。

震災後の見聞にもとづいて戯曲「露ふかく」が発表されたのは大正14年でございます。



神田駿河台に知らぬ人はいない大店・内田商店も震災には勝てませんでした。幸い駒込の控宅が助かったので、店の者も、また出入りの職人家族や長唄のお師匠さんまでこの家へ逃げ込んで、震災後の不自由な日々を一緒に暮らしておりました。

主人の友吉は残暑を避け、妻子を伴って伊香保に静養中に地震が起こり、いまだ当地に留まったまま。友吉は舞台には一度も登場しませんが、店と人々を大きく覆う屋根・廂のような人物です。

友吉の娘の嫁ぎ先・岸本商店の主人亮一は小伝馬町の旦那と呼ばれていますが、これも男らしい立派な経営者。岸本商店も店を失って家族ともども駒込の内田邸へ逃げてきたのですが、はつらつと明るさを失わず弱音を吐かない。自らの店だけでなく、主人が留守の舅の店へも目配り、采配がゆき届いて怠りがありません。まことに頼もしい人物です。

一方、だらしのない者もおります。やはり親戚筋で矢の倉の旦那と呼ばれる和介は、好人物なのですが、人が好すぎるのと酒にだらしががないので家産を失い、友吉に対しても見とおしの立たない借金を負っています。和介は飲まず食わず、溝水をすするようにして駒込の家へ辿り着いたものの、さすがにはいりにくい。うろろうしている怪しげな姿を自警団に見咎められ、ひどい目にあおうとする寸手のところで店の者に助けられます。助けられた途端に気がゆるんで、倒れ込むようにして内田家の客となったのでした。不義理を負った身でありながら、絹の布団に寝かされ、やがて主人が戻った祝いの席にも主人の隣席を与えられて、ちょっと矢の倉の旦那の昔に戻った気分。主人・友吉は落語の「厩火事」の孔子様のような人物にもみえますね。しかし和介は友吉の情に深く心をうたれながらも、結局は何もできない。この日も酔って、わけのわからないことをいいながら、前後不覚に白河を夜舟で渡っていったのです。

店員の朔どんは元来病弱なところへ、震災で近い身寄りを失った。たしかに気の毒な人なのですが、自らの非力をみな天災に転嫁し、悲観的に愚痴をかこつ。自分ほどかわいそうな者はないと自分を甘やかし、他人の同情を求める、気性の弱い青年。



下職・善吉の女房およしは、これと正反対のしっかり者。亭主は仕事に出たまま生死不明。しかし不安を顔に出さず、けなげに働く女。

震災に遭遇して、普段は現われない心ごころ、一軒の家の中で、それが鮮明に照らし出されます。そして残暑の厳しい震災直後から、蟬の声も弱まり、空の色が水のように澄んできて、やがて庭に虫の声がしげくなる季節のうつろいの中に、心ごころの交錯の様子が描かれて——「露ふかく」はこのような作品です。

## 「露ふかく」(二) ——世相

人々の心理的交叉だけでなく、この芝居には久保田が見聞きした世相のあれこれが巧みに取り入れられておりまして、その記録としても貴重です。いくつか例をあげてみましょうか……。

(i) 真偽のほどは確かでない暴徒の存在と、独断的で冷静さを欠いた自警団の噂。

〈自警団員の一 一昨日の晩から昨日にかけて、暴徒の主力は大てい掃蕩したと警察ではいつてゐます。……が、まだ安心は出来ません。……(中略) …

店員の三 自棄になつてね。……

自警団員の一 (うなづく) さうです、自棄になつて。……げんに、今朝の、富士前町と肴町と二ヶところから出た火も放火のうたがひが歴然としてあります。……中里の植木屋の井戸へ避難民のやうな顔をして水をもらひに立廻つた奴の風態がどうも可らしいと思つて取つ摺まへてみると、此奴。……案の定さうです。

店員の三 入れたんですか。毒を？

自警団員の一 い、鹽梅に、まア、それだけは未然にふせぐことが出来ました。〉

自警団員の殺気立った様子についても、こんな台詞が用意されています。

〈藤吉 あれは、うろんとみられて返事のしようでも悪かつたらすぐに叩きのめされますね。……みるから凄いの。…

店員の二 気が立つてゐますからね、とにかく……〉

(ii) 報道・情報の不正確。人の噂ばかりでなく、新聞報道などにも随分といい加減なものがあったようです。こんな会話を聞いて下さい。

〈三五郎 そのうへ東京のことは搔暮分りません。……土地の新聞を見れば、たゞもう大きな字で、東京でも横濱でもみるかぎりの焼け原で草一本生えてゐない。……被服廠だけでも十万人……

平蔵 <sup>じやうだん</sup> 戯談いつちやいけねえ。……

三五郎 ほんたうに、でも、さう書いてある……そのなかを暴徒が隊を組んで暴れまはつてゐる……女子供のみさかひなく人は殺す、火はつける、強盗はする……)

そういえば荷風の『日乗』にも9月3日の記事に「微雨。白晝處々に放火するものありとて人心恟々たり。各戸人を出し交代して警備をなす」云々と書かれています。

(iii) 次に、こんなときには必ず起こる商店の売り惜しみ。朔太郎が本郷の青木堂——只今でいうスーパーですね——へ出かけて行き、台所でいつかつたものを買おうとしますが何も無い。

〈朔太郎 暗くつてよくは分らなかつたけれど、みたところぢやア棚はもうガラガラだつた。

店員三 ガラガラ？

店員二 (急に) かくしてゐるんですよ、それは。……さうですよ、きつと……)

病人の往診にきた關野医師も薬品の売り惜しみについてこんなことをいいます。

〈關野 東京の大きな薬種屋<sup>くすりや</sup>はどことも焼けてしまひました。……ほしいと思つても手に入りません。……(中略)……それは、まア、廣い東京です。……さがせばどこかしらにあります。……が、さきをみ越して、さうして、持つてゐても商賣人は離しません。……(中略)……阿漕<sup>あこぎ</sup>なことをします、それは。……)

(iv) それから震災後、幾日かして、なんでも無いことをきっかけに戻つた、ささやかな笑顔。

〈およし ふだんなら知らずにとほつてしまひさうな小さな店のまへに大ぜい人が立つてをります。……何かと思つて覗くと、みてゐるまへで、蒸籠をつんでこのお饅頭をふかしてゐるぢやアございせんか。……あんまりいゝ色をしてゐるんで素通りするのが惜しくなりました。……それから入つて買つてまゐりました。……(中略)……

亮一 一週間ぶり、わたしは、菓子の顔を見ました。……でも、何のかのいふものゝ、あゝいふものをこしらへるだけになつたんですね、世間も……)

### 水上瀧太郎の九月一日

久保田の先輩にあたる水上瀧太郎(本名・阿部章蔵)も荷風の、そしてそれ以上に泉鏡花の強い影響を受けて作家の道にはいった人です。明治44年に「山の手の子」を『三田文學』に発表したのち、数年間欧米に遊学。帰国後は父・阿部泰蔵の創業した明治生命保険會社へ入社して実業人の道を歩きつつ、作品を書き続けた人です。

震災の日は家族とともに鎌倉・稲瀬川の別邸に滞在中でした。家は倒壊し、危い場面もあったのですが、水上は家族を守って男らしく陣頭指揮にあたった様子が伝えられています。

大正12年、震災の直後に書かれた随筆「所感」の中に、水上はこの折の体験を書きとどめております。

〈大正十二年九月一日地震の時、自分は鎌倉に居た。家は倒れ、危く身を以て逃れたが、十数人の同勢の中で、親類の十八になる娘が一人逃遅れて下敷になつた。それが不思議に微傷も負はずに這い出して、芝生に集まつた一同が互の無事を祝しあふ間も無く、再び海嘯に脅され、女子供を勵まして裏山の松林に避難し、一息ついたと殆ど同時に、東西に起つた火事の煙は、松林にもかゝつて来るのであつた。頼みにする者よりも頼みにならない者の方が多く、底冷のする上に敷いた荒筵の上に二夜三日露に濡れ雨に打たれ、山崩れの音を聞きながら、食糧の乏しさと、鮮人襲來の流言に心を寒くし、其後は又病人の續出に、如何なる身の末かと心細く、由井が濱一帶の慘澹たる光景を山の上から見下して、人間の意氣地のなさを歎いたのであつた。〉

その折の経験に基づいて書かれた小説が「九月一日」。大正13年正月の『随筆』誌に発表されました。



ここは鎌倉・由井ヶ浜にある曲淵<sup>まがひぶち</sup>家の別荘。8月も尽きようとする季節、両親は既に帰京して、別荘には一郎とふたりの妹、一郎の友人・澤、遠縁の娘・養子、それに使用人たちが滞在しておりました。

裕福に満ち足りた家庭に育った一郎兄妹のひと夏は屈託のない、はなやかな色どりに溢れた青春の舞台でした。ことにこのひと夏、一郎は横浜で貿易商を営む岡部家の娘・翠子との恋を得て、鎌倉生活はひとときわ精彩に富むものでした。

それにひきかえ、澤と養子はそれぞれに不幸な育ち方をして、曲淵の家に厄介になっている身分。澤の父親は財産を蕩尽して志を得ぬまま死んだ政治狂でした。また養子の父親は事業に失敗したうえ手形偽造の嫌疑を受け、自ら命を断ったのです。ふたりとも自分の力に頼むところはあるものの、一郎兄妹との間には当然越え難い一線が画されているのでした。澤と美貌の養子との間にいつしか互いにひきあう気持が芽生えたのも自然のなりゆきでした。

と、そこへ思いもかけなかった大震災。別荘は倒壊し、一郎と上の妹、それに澤は辛うじて屋外へ逃れ出た。だが下の妹とそれをかばった養子のふたりは崩れ落ちる屋根の下に押し潰され、これは絶望と思われました。津波と火災に追われるように、残った人々は裏山の松林へ逃げた。長い時間が経過して津波はひいたらしいというじいやの話しに、一郎は妹と養子の無残な死を思いながら

家に戻って見たのでした。庭先にまわると——芝生の中に午後の陽光をはね反すような紫の色が一郎の目を射た。それは妹の矢飛白ではないか！ そばに立ち上ったのは養子……僥倖と養子の気丈さのおかげで、ふたりは奇跡的に助かったのです。

しかし岡部家の兄妹——つまり翠子とその兄とともに震災の犠牲になって、はなやかな一郎の恋は一転して悲惨な結末を迎えたのです。澤と養子はいたましい思いで一郎のうちのめされた姿を見た。しかしその一方で、ふたりがいまこうして生きて、「斯うして並んで坐つてゐる幸福を頭の中では強く考へてゐた。」

震災を境に一郎兄妹の、そして澤と養子の生活の色あいは全く違ったものになったことでしょう。翠子を失った一郎は、この日までの豊かな何の屈託もない青春に安住する生活を出て、深い悲しみを知ったうえで逞しい青年に成長したでありましょうか。それともあまりにも大きな喪失感に勝てず、暗い虚無的な心の持ち主に変わってしまったのでしょうか。澤と養子はやがて結ばれるのでしょうか。それはみな読者の想像に委ねられています。しかし震災という異常事態のさ中で人々が見せる平常とは異質の心と体の働き、それを境とした人々の内面のうつろい——失ったものもあるが、一方であたらしい光の下にはじめて見えてくるものもある——それがドラマチックに活写された作品です。



ここでチョット申し添えておきたいのですが、水上が稲瀬川の別荘で地震に遭遇したとき、小泉信三も鎌倉にいました。小泉が欧州遊学を終えて帰朝したのは大正5年の春、その年の暮れに親友水上の妹とみと結婚して、鎌倉に世帯をもっていたのです。

なんとか家族は無事に庭へ逃れたものの、近隣の家屋敷は跡形もなく崩れ、ただ土煙が濛々と立ち昇っている。我家もまた波に漂うように揺れ動くさまを、小泉一家は楓の樹下に蹲って、呆然と眺めていました。その楓の下に戸板をわたして屋根がわりにしまして、それへ蚊帳を吊って幾晩かをすごしたそうです。そのうち傾いた家に支柱を施して、まがいなりにも住めるようになりましたが、電気もつかず、一時的鳥流しのようなありさまでした。小泉はこんなときでもなければ読めない本を読もうと思ひ立って、買ったままになっていたピグーの大著『厚生経済学』を取り出しまして、ろうそくの明りに目の痛むのをこらえつつ、これを読んだのです。ここに持参致しましたが、その折に先生がお読みになりましたピグーの本です。[小泉旧蔵の『厚生経済学』を供覧] 読後、この勉強の成果は「社会政策の経済理論」と題する論文に実を結びました。小泉の戦後の作品『読書論』に出てくるエピソードでございます。

## はち巻岡田：再会

銀座三丁目、松屋裏のチョット奥まったところに、「はち巻岡田」という料理屋があります。先年、二代目主人の千代造さんが亡くなって、現在はご子息の幸造君が三代目として包丁を握っています。これから申し上げますのは大正の震災を乗り切った、この店の創業者夫婦——千代造さんのご両親の物語です。

水上は随筆「所感」の中で鎌倉での実体験を書き留めたことは既に申しましたが、東京に帰ってからの感懐をこう記してもおります。

〈東京に歸つて、九段の上や上野の山から、見る限りの焼跡を望み、日本橋や京橋の真中に立つて、四方八方何處にひとつ昨日の面影を止めて居る所の無いのを見た時は、幸ひに命を保ち、住居も焼残つた自分さへ、身の置所の無い、生甲斐の無い心持にうちのめされてしまつた。天變地異の暴威の前に、小賢<sup>こさか</sup>しい人間の力は、在つて無きが如きものに感じられた。

けれども、此の意氣地の無い心持は、存外長くは續かず、日を経るに従つて、人間の力が蘇生して來た。恰も病人が回復期に向ふと忽ち昨日までの苦痛を忘れてしまふやうに、地震海嘯火事に脅された時の驚愕よりも其の暴力に對抗して、人間力のあらん限り戦つて見ようとする意志の方が自分を支配し始めたものである。〉

こんな気持ちになり始めた頃、水上も後輩の久保田も、ふと銀座の一軒の酒亭のことが気にかかるようになった。かねてからよく通つた岡田という名の料理屋です。主人がいつも豆しぼりのはち巻をしているので、通称「はち巻岡田」。

ある日、久保田が阿部（水上）家を訪うと、夫人が「今日は、かへりに、銀座の岡田へよるといつて出ましたから」と応待に出た。久保田が思わず「岡田の行方が分つたんですか」とたずねると、「えゝ。——久米さんからもとのところにあるといふおはがきを頂きました」との答えです。久米さんというのは、当時帝国劇場にいた久米秀治のことです。

水上はまずひとりで岡田を訪い、主人夫婦と互いの無事を祝しました。次に今度は久保田と連れ立って、焼け跡に形ばかりの小屋がけで商売を始めたこの店へ足を向けたのです。ふたりは麴町三丁目から乗合自動車で日比谷へ、そこで電車に乗り換えて銀座。

〈銀座で下りると、角の、服部のあとに、どうしたのか眞つ青な水が一ぱいにたまつてゐる。——ライオンの、屋根の低いペンキ塗りのバラックがつまらなさうに立つてゐる。

銀座は、まだ、どこにも恢復の手がついてゐない。〉

久保田が「ヤァ」と呼びかけると、おかみさんは黙って丁寧に頭を下げました。主人はいつもの

ようにはち巻をしめて、「怯げない顔でおでんの鍋のまへから景氣よくわらつた」——久保田はこの日の再会を、新派の喜多村緑郎に宛てた体裁の「喜多村におくる」という文章の中に書き留めています。そして一句——

秋風や水に落ちたる空の色

水上の小説「銀座復興」はこの再会をモチーフとして構想された作品です。

### 「銀座復興」(一) ——小説

焦土と化した銀座、その中でトタン<sup>とたん</sup>葦簾<sup>あしぜん</sup>掛けの粗末なつくりではあるけれども、とにかく料理と酒を商う、銀座復興の一番槍をつけた馴染みの酒亭の心意気に、水上ははち巻夫婦は無事であったかという感懐とともに痛快な共感を覚えたのでしょう。「所感」には先ほど引用致しました文章につづいて次のような一節が記されています。

〈殊に事變後旬日を経たか経ないうちに、到る所にバラック建築が始まり、天幕<sup>かりずまひ</sup>の假住居をしながらも、互に商賣を營み始めた避難者の活動を見た時、自分は痛烈に人としての生甲斐を感じた。……(中略)……家を焼いた者、財産を失つた者、最愛の者に死別れた者、すべてが悲嘆のどん底から復活して來た。未だ衣食は足らざるも、折柄の満月の下にバラックの内で笛を吹く者さへあつた。〉

はち巻夫婦に代表される単純明快な、それだけに逞しい生命の力に共感し、これを是とする水上にとっては、返す刀でともに復興を語るに足りずと面罵したくなる人もおりました。(イ) 自然力を絶大と見、人力を無の如くに考える人。(ロ) 人の社会の成長を信ぜず、自然への回帰を唱えて、竹の柱に萱の屋根の生活を賛美する人。(ハ) 近代文明の弊を論じ、徒に回顧にふける人。(ニ) 自らの不道德と私利私欲を棚に上げ、口に公德を説き、今次の災害を天譴と称する、欺瞞的で貧弱な思想の持ち主。

——世の中を形づくるいくつかの類型に属する人々が焼け跡の小さな酒亭で相客として触れ合うところに生ずる心ごころの反応——小説「銀座復興」はもちろん、逞しい生命への讃歌であると同時に、この心ごころの反応を見きわめる実験室でもあったのです。



「これが銀座か」——一瞬にして崩壊した虚栄の市・銀座。品川の海さえ見はらせる、ただ残骸の堆積。牟田は照りつける残暑の中に佇立しました。丸の内の三葉商事に勤める若いサラリーマンの

牟田は、自然の暴力に立ち向う人間の力の蘇生と戦う意志力を信じようとする作者水上瀧太郎の分身とってよいでしょう。

立ちつくす牟田に突然声をかけた男がおりました。「牟田君じゃあないか」——高級装身具を商う銀座の老舗、ぜいたく屋山徳の旦那山岸。ふたりは中学までは同級生でしたが、牟田が大学を出て勤め人になったのに対して、山岸は父親を亡くしてその身代を嗣ぎ、商売の道にはいったのです。早くから金が自由になりましたから、花柳界を泳ぎまわり、なにかと女出入りの噂も絶えないという、絵に画いたような若旦那ぶり。しかし震災でペしゃんこになってみると、大店の湯気で育った若旦那には「なあに！」と立ち上る気力が一滴たりとも湧いてこない。昨日までの銀座は夢と消えて、もう帰ってこない。かつての山徳のような商売もおしまいだ。——自暴自棄のうちに奉公人も暇を出し、酒も煙草も断って、荻窪へ引っ込み、畑仕事の真似ごとに日を送っておりました。

銀座は必ず復活すると主張する牟田の言葉は、山岸には傷つかなかった者の無責任なから元気に聞こえる。気まずい気分を残してふたりは別れたのです。

牟田の目と鼻の先を、人を満載した牛車が通って行きました。その中に美しい横顔を見せた女がひとり、牟田の目にとまりました。「あゝ、あの女も生きてゐたか」——こう思った途端、思わずこみ上げるような感動に牟田の目には涙が溢れました。しかしあの女——どこで見た女だったか？ そうだ麦酒会社の宣伝ポスターのモデルになった芸者にちがいない。——生きていたのか……。

いまの中央通りを西から東へ横切って、町の残骸にのぼってみる——牟田はわが目を疑いました。すぐ足下に垂鉛、<sup>トタン</sup>葺<sup>よしず</sup>簾がけの小屋が一軒、裸同然の男が大工仕事をしている。そして女房でしょうか、女は褌がけで洗濯に余念がありません。男は文吉、女房はおとく。小屋には大きな貼紙がしてあって、こう書いてあります。

復興の魁は料理にあり

滋養第一の料理ははち巻にある

誰れもいない骸骨になった銀座にポツンと一軒のバラック——しかもこれが食い物屋らしい。なんともいえないアンバランスに、牟田は久しぶりの愉快をおぼえ、この店の客になろうとします。裸の男はまことに無愛想に、明日から開店なので今日は何もできないといいます。しかし、すぐそばのこわれた水道からは清冽な水が迸り、牟田はそれを思う存分に飲んだのでした。死んだ銀座にひとすじの生命のしるしのような水——。

するとそこへ、いかにも生気のない老人がひとり。稲村さんといって、かつては立派に店をはっていた人なのですが、人がよすぎると酒にだらしがらないことがたたって、近頃では子供を勤めに出し、自分は裏どおりに煙草屋を営んで小づかい銭を稼いでいる、はち巻岡田の馴染み客です。岡田夫婦は稲村さんと無事を祝しあい、明日開店のために用意された酒を一升だけくみかわしたので

した。牟田もお相伴で、この茶碗酒の粗末な祝宴に連ったのです。

翌日も牟田はこの店を訪れました。昨日の稲村老人に加えて、大須賀先生と呼ばれる天譴論者の政治家と、経済新聞だか雑誌だかの記者・島末さんが既に飲んでいる。大須賀先生は最劣等で大学を出て政治の世界にはいり、「泳がないやうな風をして其實<sup>たくみ</sup>巧に泳ぎ廻り、常に忠君愛國を説き、現代の文明を罵り、酒をあふりつゝ立身した人物」というのが、水上の描いたこの先生のプロフィールです。島末さんは経済記者と称して、強迫まがいの口舌でただ酒にありつこうという、大須賀先生の腰ぎんちゃく。

ともあれ、このような人々を口あけの客として、はち巻は銀座の商い復活の一番槍をつけました。口あけの客はみな毎晩のように通ってきた。噂を伝え聞いた以前からのひいきや、魚河岸の兄い連も提燈をもってくれた。

牟田は荻窪に山岸を訪い、引っ張り出すようにしてはち巻へ連れてきました。しかし山岸の捨てばちな諦めは頑なで、酒にも決して手をつけない。またも気まずい空気が漂うのを止めることができませんでした。牟田・山岸のいさかいを聞きながら、亭主の言葉はいたって単純です。

「いえね。そんなわけぢやあないけどね、つまりなんだ、ひとさまの爲に働けば、こつちにも悪い事はあるまいと思ふだけけど、そんな理窟ぢやないでせうか。」

この単純明快な言葉も、山岸の頑なにかたまった心をほどくことができませんでした。

はち巻夫婦の心の底にも不安があるのです。銀座復興の一番槍だ露はらいだと勢いこんでも、いまだに銀座は廢墟のまま、誰れもあとに続く者はいないのでから……。月は次第に細くなり、虫の声は日に増して高くなる。結局銀座はこのまま萎んでしまうのか、口に強がりをつけても夫婦の不安は深かったのです。

と、そこへ遠くから人の話し声がし、提燈が三つ、こちらへ揺れながら近づいてくるではありませんか……。誰れだろう……。追い剥や強盗が噂になる折しも、一瞬の緊張がはしりました。提燈はまっすぐ店に近づいて止まった。「こんばんは」——声の主は、以前すぐ近くで薬屋を開いていた三井さんをご町内の衆でした。噂に聞いて半信半疑だったけれども、一同はち巻夫婦の一番槍に続く決心をした、11月1日までに京橋から新橋へかけての銀座八丁、表通りだけでもまがいなりにも店を並べて燈りを点け、銀座復興大売出しをやろう、ついでに力を合せて銀座復興会をつくるので、親方にも一枚加わってもらいたい——三井さんの用向きはこういうことでした。

みんなついてきた、銀座復興だ！——はち巻夫婦は夫婦だけに通ずる、言葉にならない言葉をかわして目を潤ませたのでした。

やがてあちこちに普請の音が響き、粗末な仮普請ながら、銀座には商いの生命が通い始めました。思い切った洋装と化粧のモダン・ガールも復活しました。こうなると一番槍のはち巻の店がかえって一番みすばらしく見え、亭主は時計やら古いビール会社のポスターやらで店の装飾を工夫しなけ



ればなりませんでした。「復興節」と称するはやりの歌が町に流れました。

そして11月1日、にわかごしらえの銀座がともかくでき上がった。はち巻夫婦は看板の菊正の樽を据え、ひいきの客を招いて銀座復興を祝うこととした。例の顔ぶれが揃った。ところが、肝心の電燈がまだ点かないので困りました。もう一晚ランプを点けようかとおかみさんが気を揉むとき、パッと明りが点いたではありませんか！ 電燈とはこんなにも明るいものだったのでしょうか……。

新来の客の声——「いらっしゃいまし」とおかみさんの声もひとときわ明るい。客は思いがけなく山岸でした。銀座復興大売出しと聞いて半分嘲るつもりで、しかしやはり気になって出てきてみた、京橋からまっすぐに、みんなが気を揃えて店を並べたその心意気、その中で櫛の歯の欠けたように黒々と暗いのは自分の店の地所だ。なんとも悲しく、自分だけがのけ者になったような気持ちに責められた——山岸はこうしみじみと述懐するのです。やはり故郷は懐かしい、自分も銀座へ帰ってくる、人が仮普請なら、まず山徳が本建築の先陣を承ろう、今日から禁酒もやめだ——こういって山岸はぜいたく屋の旦那に戻って、銀座復興の仲間入りを宣言するのです。

山岸にはすぐそこで会ったという婦人の連れがあった。焼け出された粗末な身なりながら、洗い上げた美貌は隠せない。新橋の千八重——親方が店に飾ったビール会社のポスターのモデルにはかなりません。そして牟田が廢墟の中に初めてこの店を見出した日、牛車に揺られて牟田の目の前を通っていった「あの女」は、ビールのポスターで見馴れた千八重だったのです。

この奇妙なとり合せの客たちは、銀座復興に万歳を唱え、はち巻夫婦を囲んで、行進するように銀座の町へとくり出していきました。

## 「銀座復興」(二) ——戯曲

久保田万太郎が水上の小説『銀座復興』を戯曲化したのは昭和19年、戦争も——米内光政提督の言葉を借りますと——所謂ジリ貧に陥ってからのことでした。

昭和10年、久保田の妻・京が薬を大量にのんで事故死とも自殺ともつかぬ死に方をして以来、水上と久保田との間の交友は事実上途絶しておりました。京夫人の死の背後に、無視できない暗い影を落としている久保田の生活のあり方を許さなかった水上の義憤とみなればなりません。これは水上の親友でもあり、義理の兄弟でもある小泉信三と久保田との間にも大きな溝をつくることになったのです。しかも15年、水上は脳溢血でこの世を去りましたから、この交友の断絶は久保田にとって文字どおり取り返しをつかない、しかしどうにもならない痛恨事であったにちがいません。この事情を考えると、久保田が水上の「銀座復興」の脚色を手がけたことには、人知れず深い感慨があったことと察せられるのです。

戯曲「銀座復興」は、まず敗戦直後の昭和20年10月、11月に帝国劇場で上演され、六代目菊五郎が文吉に、多賀之丞がおとくに扮しました。二度目は平成8年、大田区民プラザにおいて文学座

が上演しました。阪神淡路大震災の翌年のことで、私ははち巻の二代目の女将・肥子さんと一緒に劇場へ行きました。そしてさらに東日本大震災の年、平成23年の師走、今度は新派朗読劇として慶應義塾において上演され、さらに翌年、三越劇場で再演の機会を得たのです。ただし、久保田の戯曲は、朗読劇という上演形式に即して、新派の演出家・成瀬芳一氏により再構成されました。

久保田の戯曲はもちろん水上の原作に即して書かれたものですが、いくつかの点で独自の工夫が凝らされております。

(i) まず原作冒頭の牟田と山岸の再会の場面はカットし、牟田の話しの中で語らせることにしました。そのかわり千八重ともうひとりの女（内箱でしょうか……）を出して、廃墟の中をゆきまどい疲労困憊のふたりに牟田が声をかける場面をつくったわけです。そして水を飲みたいという千八重に、水道がこわれてこぼれ出ている清冽な水を存分に飲ませる。こうすることによって、千八重に扮する俳優に印象的な芝居の場が与えられ、最後の復興大売出しの場にもう一度登場させて、この俳優に花をもたせることができるわけです。

(ii) 明日から開店の準備がどうにか整い、三人の男が一升の酒を飲みかわすうちに、日はもう西に傾きます。そこへ、どこから飛んできたのか一匹の蟬が啼きだす。そしておとくの台詞——「あら、蟬……」千八重が飲んだ清冽な水とこの蟬の声、すべてが死んだ銀座の中に、細い、しかし確かな生命のしるしです。しかも震災の前と後をつなぐ糸でもある。おとくに扮する俳優には、この短い台詞を是非上手にってもらいたいものです。

前に小泉信三が鎌倉で震災にあい、その折の経験を書き記していることを申しました。実はその小泉の文章の中にも蟬の声の印象が書き留められているのです。半鐘が鳴り、余震は絶え間なく襲ってくる。ふと震動がやむと、合図のように山で蟬が鳴きだす。そして「たゞ此の蟬の聲だけが、遠い昔の世と今とを繋ぐもの、やうに感じられた」という一節がそれでございます。

久保田と小泉は殆ど交友を断っておりました。しかし、震災という異常な状況の中でも、蟬の声に互いに相通ずる詩情を抱くふたりの心の動き方に、私はふとほほえましいものを感じました。

(iii) 久保田劇では原作にない幾人かの登場人物を出しています。幕開けに千八重と一緒に出る内箱の女もそうですが、より重要な役割を演ずるのはお久さん。おとくと姉妹のように育ったのですが、震災で生活を破壊され、夫の郷里の北海道へ移住せざるをえない。箱根、日光より先には行ったこともないという当時の女に、北海道はどんなに遠く感じられたか、震災により、こうした境遇の変化を甘受しなければならなくなった人物を、ひとり舞台に出したわけです。

もうひとりのはち巻の客で瀬越さん。株の取引に携る金持です。この人は山岸と同様、銀座のゆく末について暗い、悲観的な展望を抱いており、はち巻夫婦に深手を負わぬようにとアドヴァイスする。この人物が出ることによって、はち巻夫婦の不安が一層深まるわけでございます。他方、店が次第に賑やかになる空気を描くために、幾人か河岸の人々を登場させてもいます。

(iv) 三井さんをはじめとする復興会の人々が、大売出しの計画を話しにきたあと、はち巻夫婦の心



文吉を演じる田口守



おとくに扮した瀬戸摩純

### 新派「銀座復興」

からはさっきまでの深い不安が拭いさられる。「ついて来たじゃアねえか」、「え、」……という単純な言葉を繰り返す夫婦の素朴な勝利感。ふたりの目にあふれる涙。……これも久保田の作劇です。

新派朗読劇の初演でおとくに扮した瀬戸摩純は、前に申しました「あら、蟬……」と、このこみ上げるような「え、」の台詞で完全に客席の心をつかみました。復興大売出しの日、なかなか点かなかった電燈が突然パッと点く。その瞬間、客席からも思わずホーッとという嘆声もれました。これも田口守と瀬戸の演ずるはち巻夫婦が、水も漏らさぬほど見物客の心を舞台にひきつけた結果でございました。

(v) 原作は、一同が町へ行進してゆくところでおしまいになるのですが、久保田はここでもひと味加えて、いかにも万太郎ごのみの幕切れにしました。みんながワイワイと出ていったあと、留守居を引き受けた稲村さんが、ひとりお銚子を傾けながら、口三味線で常磐津の「うつほざる鞆猿」かなにかを気持よさそうに語りだす。そしていつしかウツラウツラと無我の境に入る……またも遠く近く聞こえるジンタの音楽……幕。万太郎のお家芸ともいうべき、「大寺学校」の幕切れと同工異曲の工夫です。

### 東京行進曲

銀座復興大売出しが人々の口の端にのぼる頃になると、早くも震災前の派手ないでたちで通りを歩く男女も現われたそうで、そのような世相・風俗もはち巻に集まる酔客たちの噂にのぼりました。おとくも見てきたばかりの「凄いようなハイカラ」の女をこんな具合に写生して客に聞かせるのでした。

〈淡紅色の膝つきりの洋服に、眞白の靴下で、踵の高い靴を穿いて、白粉を濃く、眉毛を墨で描き、口のわきにほくろまで入れて、よくまあこの際あんな風をして焼跡を歩けたものだと思つてゐますと、向ふから來た洋服を召した紳士みたいな方が、いきなりつばきをひつけて、賣女つて怒鳴つたんでございますよ。〉

牟田はすこし酒がはいって、そんな輕薄さも銀座の一面だと、なんでも肯定したいような気分から、  
〈それも復興の魁かもしれないぜ。やがて銀座にはさういふ無神經な奴がつながつて歩く日が來るよ〉

と朗らかにいうのでした。

牟田の予告した銀座の、震災後の新しい世相を歌謡曲という形でとらえたのが西條八十でした。仏文学者の西條八十が歌謡曲の作詞を手がけるようになった契機のひとつは、実は震災だったのかもしれませんが。

大震災の凄惨なありさまは八十に「ポンペイ最後の日」を思い出させました。地震の折、八十はたまたま近所の床屋で散髪中で、床屋のエプロンをつけたまま、あわてて家へ戻ったそうです。落ちた瓦で額を負傷しましたが、ともかく家族は無事。淀橋区柏木の八十自身の家は半壊したものの火災は免れました。しかし親類縁者の安否が気にかかって、八十はなお余震の続くなかを出かけていきました。途上の混雑に揉まれて彷徨するうちに、まるで「藻草のようにうち上げられて」、帰ることもできない。上野公園の松の木の前かたに、ひとり蹲って一夜をすごすはめになったのでした。

夜にはいると、わずかな手まわり品だけを携えた避難民たちで、上野山上は混雑をきわめました。見おろす市街は猛火の海。

人々は疲労、不安、そして餓えのためにただ化石の如く蹲って口を開く者もおりません。夜は「騒然たる中に、しかも沈々と更けて行つた」——八十の言葉でございます。その時——八十の隣にいた十五、六歳の少年が、ポケットからハーモニカを取り出し、ちょっとためらうかのような表情を見せましたが、やがて銀色の小さな楽器を唇にあてて奏し始めました。誰れもが知る平凡な曲でしたが、なかなか巧みな演奏だったそうです。

こんな状況の下で、のん気にハーモニカなど、人々の神経を逆なでするのではないか——八十はこう気を揉んだ。ところが、周囲の人々はじっと耳を澄まして聞きいるように見えました。冷たく凍てついた人々の間に私語のさざめきが起きました。ある者は伸びをする、欠伸をする。中には歩きまわる人も現われた。つまり山上の人々にかすかな生命力と気力が甦ったのです。

少年の気まぐれなハーモニカが、人々の絶望と悲嘆の心にたちまち生命の息吹を呼びさます光景、思いがけず接したこの光景が八十にひとつの啓示を与えました。それまで高踏的な詩人学者を自認していた八十が、大衆の心に訴える詩作を志すにいたった契機——すくなくとも契機のひとつは、こ

の震災の夜に聞いたハーモニカでした。

間もなく八十は二年ほどパリへ留学。その間、故国からもたらされる風の噂に、「ストン節」や「籠の鳥」などという唄が流行していることを知りました。

帰国後間もない昭和2年、日活宣伝部の依頼で映画「椿姫」の主題歌を作詞しました。作曲は松平信博。あまり売れなかったようですが、これが流行歌の作詞家・西條八十の誕生でございます。二年の留学を経て、銀座の復興を見た八十の驚嘆は大きかったのです。その印象が結晶して「当世銀座節」が生まれました。昭和3年、作曲は中山晋平です。へセーラーズボンに引き眉毛 イートン<sup>クロップ</sup>断髪うれしいね の一節には、当時銀座で知らぬ人はいない謎の美少女・人野ゆかりのおもかげが宿っているのでしょう。またへむかふ通るは スターぢゃないか 青い眼鏡が気にかかると聞けば、すぐに女優・栗島すみ子の青い色眼鏡が連想されますね。

そしてつづいて翌4年、「東京行進曲」の大ヒットとなりました。へ昔恋しい銀座の柳 仇な年増を誰が知る——これは日活映画の主題歌でございました。八十自身の言葉を借りれば、当時の「東京のいわゆるモダン風景の戯<sup>カリカチュア</sup>画を謡で書いてやろう」というモチーフでした。作曲はこれも中山晋平。

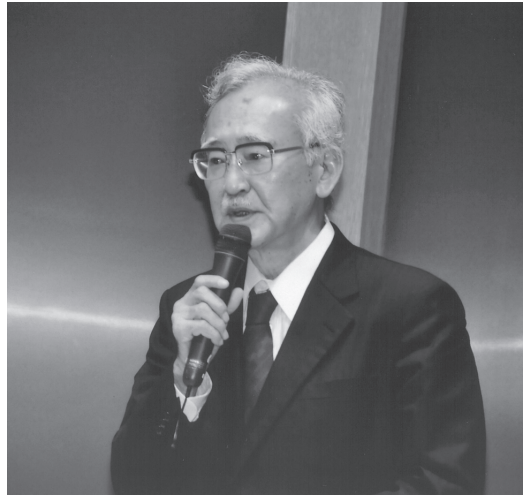
震災前の流行歌に「船頭小唄」というのがあります。へ俺は河原の枯すすき……というあれです。この歌のメロディーと「東京行進曲」のメロディー……もちろん雰囲気は全く異なりますが、歌い出しの旋律はそっくりではありませんか。[……すこし唄う……]「船頭小唄」も中山晋平作曲で、こんな頹廢的な唄が流行するから震災が起きたのだ、などという理不尽な非難も、この頃にはもう殆ど忘れられていました。

## おわりに

平成23年8月のある夜、私は当時岩波書店の社長でいらっしゃった山口昭男さんとはち巻岡田で落ち合い、とりとめのない世間話しをしながら一杯やっておりました。その頃は既に「銀座復興」の芝居を新派で上演することが決まり、準備が進んでおりましたから、そんなことも話題になったのでした。そしてどちらからともなく、水上の「銀座復興」を岩波文庫で出そうという思いつきがフツと浮かんだのです。芝居をやるなら、それにあわせて本も出すのがタイムリーじゃあないかというわけです。「『銀座復興』だけでは本として分量が足りませんね。」「やはり震災を扱った『九月一日』のような作品がありますから、併せて一冊でどうでしょう。」「解説はどうします?」「そりゃあ坂上弘さんに……。」「そうだ、文庫の編集担当には村松真理さんがいる。例の『三田文學』新人賞の……。」といった具合に、具体的な細部までアイデアが出て、ドンドン決まっていくかのようでした。実はこの日こんな話しをするつもりではなかったのです。いま思いついたばかりのことで、もちろん厳しい社内の企画会議を通さねばなりません。それは承知のうえで、山口さんは確信に満



山口昭男氏



坂上弘氏

新派「銀座復興」上演後の舞台挨拶

ちた表情でいきました——「これはきつとうまくいきますよ。しかも思いついたここはち巻岡田だ！」こうして「銀座復興」の文庫化が実現し、坂上さんの見事な解説が大きな付加価値を添えて下さったのでした。すぐに渡辺保さんが書評を書いて下さいました。

さらに、坂上さんが理事長を務めていらっしゃる三田文学会では、水上の原作ではなく、久保田万太郎による戯曲の方を『三田文學』誌に再掲載して下さいました。

そしてもうひとつ、成瀬芳一さんご苦心の新派朗読劇用の脚本が、同氏の他の作品と一卷にとりまとめられて、<sup>せいあ</sup>青蛙房から出版されました。

「銀座復興」の新派上演にあわせて、この三つの出版企画が互いに他を支えあうようなタイミングで実現のはこびとなりまして、これは私ども関係者には言葉に尽くせぬ喜びでございました。

上演の当日、終演後に山口さん、坂上さんのおふたりは揃って舞台に上がり、出演俳優のみなさんに囲まれるようにしてご挨拶下さいました。

またこの日の夜、関係者一同はち巻岡田を貸切にして、「銀座復興」の上演を祝いました。お集まりの皆さんの中には水上瀧太郎・小泉信三両先生にゆかりの方々もいらっしゃいました。出演した新派の俳優さんたちがかわるがわるご挨拶したとき、水上瀧太郎令息の慎蔵さんが「やあ、牟田です」といわれ、みんなお芝居と現実がミックスして、狐につままれたような顔になったり、意味がわかって大笑いしたり……。なんとも忘れ難い一夜でした。

さて、東北の震災から三年が経過した本年3月、「銀座復興」上演のときの経験を生かして、今度は「九月一日」の上演が実現しました。私は震災からの復旧の現状を多面的に検証するための講演会を前々から企画していたのですが、これとお芝居の二部構成にして、より多くの方々に関心をもっていただきたいものと考えたのでした。今回もまた成瀬さんの手を煩わせて脚本を拵っていた

だき、劇団新派による朗読劇の形式で、「九月一日」は初めて舞台化されたのでした。

この冬、私は被災地を巡りながら、少なからぬ衝撃をおぼえ帰京しましたが、見聞きしたものの感慨に輪郭のしっかりした形を与えるのは難しいことです。私どもはそれを言葉に写しとることによって、実は初めて目にふれたものを「見る」ことができるのではないのでしょうか。漠然と流れていくものを、ただ目で追うのではなく、それをつなぎとめ、掌にのせてよく見ることができる。それが言葉の力です。

震災に限らず、「異常」の中に現われる心ごころの変化は、やがて「日常」への回帰とともに、何ごともなかったかのように色褪せ、記憶から消えてゆきます。それをつなぎとめ、われわれに思索を促し、単なるから元気・無鉄砲ではなく、知恵に支えられた勇気を生む——それを可能にするのが言葉の力だと申したいのです。

震災に因んだ私どものいくつかの企画——本の出版にせよ演劇の上演にせよ、その実現への努力は、この言葉の力を信じてなされたものでした。山口さん、坂上さん、劇団新派のみなさんはじめ多くの方々によるご協力と心意気は、震災の傷あとから滴る血汐を、いつか香りたかいブドウ酒に変える力となるにちがいないのでございます。

有難うございました。

(経済学部教授)

#### おもな参考文献

まずこの講演で取り上げた作家たちの作品を記録しておこう。

##### 永井荷風

『断腸亭日乗』

震災前後の記事は

『荷風全集』(岩波書店)第19巻(昭和39年)

##### 久保田万太郎

「喜多村におくる」『随筆』大正12年、『久保田万太郎全集』(中央公論社)第10巻(昭和42年)

「夏かげ」『新小説』大正13年、『全集』第10巻(昭和42年)

「露ふかく」『中央公論』大正14年、『全集』第5巻(昭和42年)

「銀座復興」『三田文學』昭和19年、『全集』第8巻(昭和42年)『三田文學』平成24年に再掲

##### 水上瀧太郎

「所感」『時事新報』大正12年、『水上瀧太郎全集』(岩波書店)第9巻(昭和15年)

「九月一日」『随筆』大正13年、『全集』第3巻(昭和16年)

「銀座復興」『都新聞』昭和6年、『全集』第7巻(昭和16年)

なお「九月一日」、『銀座復興』は岩波文庫版『銀座復興』(平成24年)に収載。

##### 小泉信三

『海軍主計大尉小泉信吉』私家版、昭和21年、『小泉信三全集』(文藝春秋)第11巻(昭和42年)

『読書論』（岩波新書）昭和 25 年、『全集』第 14 卷（昭和 42 年）

西條八十

『唄の自叙伝』（小山書店）昭和 31 年

その他、以下のような文献を参照した。

- [1] 秋庭太郎『考証永井荷風』（岩波書店）昭和 41 年
  - [2] ———『永井荷風傳』（春陽堂）昭和 51 年
  - [3] 佐藤春夫『小説永井荷風』（新潮社）昭和 35 年
  - [4] 今井達夫『水上瀧太郎』（フジ出版社）昭和 59 年
  - [5] 大江良太郎『家』（青蛙房）昭和 50 年
  - [6] 戸板康二『久保田万太郎』（文藝春秋）昭和 42 年
  - [7] 丸山徹「劇場の久保田万太郎」『三田評論』平成 19 年 6 月
  - [8] 筒井清忠『西條八十』（中央公論新社）平成 17 年
  - [9] 斎藤憐『ジャズで踊ってリキュールで更けて』（岩波書店）平成 16 年
  - [10] 和田登『唄の旅人 中山晋平』（岩波書店）平成 22 年
  - [11] 成瀬芳一『銀座復興』（青蛙房）平成 24 年
  - [12] 木村朗子『震災後文学論』（青土社）平成 25 年
- 最後にあげた [12] は東日本大震災をモチーフとして発表された多くの作品を展望した力作である。

糖業協会の講演会の折には、話しの前後・途中で「船頭小唄」（森繁久弥）、「復興節」（桜井敏雄）、「東京行進曲」（藤本二三吉）などの流行歌を会場の皆様にきいていただいた。

[付記] 東北被災地調査の折、日本銀行仙台支店の皆様ならびに大内新興化学工業株式会社の大内康平会長、同原町工場の皆様には多大のご支援とご指導を賜った。とくに記して感謝の意を表する。